

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	在仏アルジェリア系女性史に関する現地調査と仏国際学会への参加
氏名 Name	杉村 文
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	文学研究科現代史学専修博士後期課程 1 年
渡航国 Country	フランス
渡航日程 Travel schedule	2025 年 9 月 5 日～2025 年 10 月 23 日

- ・ ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- ・ 写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- ・ 各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- ・ 日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

< 申請者の研究について >

申請者は、アルジェリア独立戦争（1954～1962 年）がフランス本土に及ぼした政治的・社会的影響、ならびに「戦後」フランス社会における「戦争の記憶」の形成過程に関心を持ち、移民史・ジェンダー史・記憶史のアプローチを交差させる学際的な現代フランス研究に取り組んできた。その中で、「移民」かつ「(ムスリム) 女性」として、コミュニティ内外での複合差別の問題に直面してきた在仏アルジェリア系女性たちに注目し、独立戦争期から「戦後」に至るまで、現代フランス社会における彼女たちの多様な政治・歴史実践のありようを実証的に明らかにしようとしている。

< 今回の渡航の目的 >

今回のフランス渡航の目的は、①現地での予備調査（資料調査・聞き取り調査・フィールドワーク）の実施②脱植民地研究に関する国際学会（トゥールーズ）への参加③2025 年度のブロー歴史集会（Le Rendez-vous de l'Histoire）への参加、の 3 点である。

申請者は、現地での史料調査・質的調査を実施し、海外研究者からより専門性の高い研究指導を受けるために、博士後期課程 2 年次（来年度）以降にフランスで 1 年以上の長期研究滞在を計画している。今回の渡航は、そうした今後の長期研究滞先に先立つ予備調査として位置付けられる。博士後期課程 1 年次の段階で、現地における主要史資料の入手可能性や利用環境を実地に確認し、オーラルヒストリーの収集に向けた関係構築に取り組み、フランス語圏の研究者とのネットワーキングに積極的に取り組む機会が得られることは極めて有意義である。渡航を機に、研究テーマをより精緻化し、研究手法・博士論文の構成等についても、今後、より具体的かつ実現可能なものへと発展させてゆくことを目指している。

< 渡航先でのスケジュール >

日付	内容	詳細
9 月 5 日～6 日	フランスへの移動	日本 → フランス
9 月 7 日～10 月 8 日	文献・史資料収集	パリおよび近郊（国立図書）

		館、パリ警視庁アーカイブ、アルジェリア文化会館、国立移民史博物館附属資料センター、学術系書店など)にて資料調査・先行研究入手
10月9日～12日	ブロワ歴史集会(Le Rendez-vous de l'Histoire) 参加	ブロワ (Blois)
10月13日～16日	脱植民地研究国際会議 (II Colloque d'Études Décoloniales) 参加	トゥールーズ (Toulouse)
10月17日～18日	「1961年10月17日」関連記念行事への参加	パリおよびその近郊
10月19日～21日	現地研究・教育関係者とのネットワークワーキング	次回渡航に向けた学術交流
10月22日～23日	日本への移動	フランス → 日本

成果 Outcome

(1) パリおよびその近郊の文書館・図書館等における体系的な史料収集

フランス到着後、約1ヶ月間、可能な限り多くのパリおよびその近郊の文書館・図書館・資料館等を訪問し、在仏アルジェリア系住民の歴史・アルジェリア独立戦争史等に関する一次史料と二次文献について、カタログと現物双方の検索・入手・閲覧に取り組んだ。主に、フランス国立図書館(主に刊行物や記録映像)・パリ警視庁アーカイブ(アルジェリア独立戦争期の警察史料)・アルジェリア文化会館(在仏アルジェリア系コミュニティ関係のアーカイブ)・国立移民史博物館附属資料センター(移民史関連史料)といった、既に史資料の所在が明らかなアーカイブにおいて、アーキビストの助言を受けつつ、史資料の閲覧・撮影を行った。

在仏アルジェリア系女性たちに関する史資料は異なるアーカイブに散逸している傾向があるため、今後、独立戦争末期の在仏アルジェリア系女性たちの抗議デモの取り締まりの記録(パリ警視庁アーカイブ)や、複数の世代にわたる女性たちのライフストーリーの記録映像(国立図書館)等、「多様な媒体を視野に入れて調査を行う必要性を実感した。まとまった新規史料としては、アルジェリア文化会館図書館所蔵の、「移民女性と家族」「アルジェリア系女性と独立運動」などと大まかな項目で分類してある大量の新聞のスクラップ(coupages de presse)をまとめて撮影できたのも大きな収穫だった。

(2) アルジェリア独立戦争史・移民研究・記憶研究等に関する新刊の研究文献の網羅的な入手・閲覧

申請者の研究は、複数の研究分野を横断する性質を持ち、今後、博士論文執筆に向けて、フランス(語圏)の移民研究・記憶研究・ポストコロニアル研究の最新の動向を常に踏まえながら研究を進めてゆく必要がある。そのため、今回の渡航では、現地の専門書店等で、日本国内では現物の閲覧が極めて難しい人文学関連の新刊書籍を網羅的に確認することを目的の一つとしていた。

幸い、10月9日～12日にかけて、後述するブロワ歴史集会に参加した際に、国内の主要な大学出版会・人文社会科学系出版社等が一堂に会するSalon du Livre(書籍見本市)を訪れる機会を得て、仏-アルジェリア関係史の最新事情をまとめた研究書など、2024～2025年に出版された歴史(学)関連の新刊を総覧し、自身の研究との関連性が特に高いものを優先的に購入できた。また、Les Éditions L'Harmattan・Karthala・

ケ・ブランリ美術館附属書店等、フランス植民地主義史に関する専門書店においても同様の文献収集に取り組んだ。

(3) 「ヨーロッパ文化遺産の日」(Journées européennes du patrimoine) の際の複数の「記憶の場」の訪問

滞在中の9月19日から21日にかけて、「ヨーロッパ文化遺産」の枠組みで、パリを筆頭に、フランス国内の数多くの文化・歴史関連施設や類似の場所の訪問プログラムが実施された。申請者は、パリとその近郊で行われる「フランス現代史」「植民地主義」「記憶」の全てのキーワードに関連するプログラムに絞ってリサーチし、期間中に、普段一般公開されていないモン＝ヴァレリアン要塞とアヴィセンナ病院の特別見学プログラムに参加した。

モン＝ヴァレリアン要塞は、ナチス・ドイツによる占領下のフランスにおいて、対独抵抗運動に従事した人たちははじめ、民間人の大量処刑が行われた場として知られている。今回は、「帝国によって解放されたフランス」(La France libérée par l'Empire) という企画展(野外展示)の開催期間ということで、対独抵抗運動に参加し、時に処刑された広義の旧植民地出身者たちの歴史に新たに光を当てる試みとして、専門家による解説付きの見学が実施された。そして、アヴィセンナ病院は、かつて「フランス系ムスリム病院」と呼ばれ、医療の場において、マグレブ系の移民を「普通のフランス人」と実質的に「隔離」する場として作られた、これもまた、植民地帝国としてのフランス史と関わりの深い「記憶の場」である。「ヨーロッパ文化遺産の日」の際に、特にパリ郊外の自治体や博物館・文書館のイニシアティブで、旧来のフランス史と帝国史・移民史との批判的な接合を試みようとする歴史実践の現場に居合わせることができたことは、非常に有意義な経験となった。

(4) プロワ歴史集会(Le Rendez-vous de l'Histoire)への参加

毎年10月に地方都市のプロワで実施される歴史集会は、国内最大の公共史の実践であり、約一週間の会期中は、歴史に関わる講演・ワークショップ・博物館での特別展示・歴史に特化した大書籍見本市・映画上映・アートパフォーマンスといった、多種多様な企画が市内各地で実施される。今年のテーマは、2025年のナショナル・ヒストリーとしてのフランス史の揺らぎを反映したような「フランス？」(La France?)だった。申請者は、9日～12日にプロワに滞在し、狭義の専門であるアルジェリア独立戦争史に関わる研究者・教育関係者向けの学術企画に可能な限り出席するようにした。特に教育現場において、一般的にまだ「センシティブ」ともみなされる独立戦争や独立戦争期の歴史をどのように扱っているか、というアクチュアルな問題を意識させられることが多かった。

さらに、多様な歴史実践に実地で触れるべく、『はだしのゲン』を「歴史漫画」として日仏比較漫画学の観点から考察するブックトークや、「フランスの肖像」(Portraits de France)と題され、マクロン大統領の意向もあって作られた、外国にルーツを持つ人たちが今日のフランスの形成に「貢献」してきた歴史を示す巡回展をも訪れた。アメリカ南部ルイジアナにおいて奴隷制の記憶継承の形を取ったヘリテージ・ツーリズムの功罪についての博士論文を提出したばかりの研究者の報告など、博士論文提出前後の若手研究者が研究紹介を行う企画も多く、研究手法や「博論の書き方」という実際的な面でも極めて有益な学びの機会となった。

(5) 国際学会「脱植民地研究国際会議(II Colloque d'Études Décoloniales)、トゥールーズ」への参加

10月13日から16日にかけて、ジャン・ジョレス大学で開催される「脱植民地研究国際会議」の10周年記念総会「脱植民地研究 2015～2025年 ― 現状と展望：アフリカ・アメリカ・ヨーロッパ(Études décoloniales 2015–2025 – État des lieux : Afriques – Amériques – Europe)」に参加した。本学会は、近年、学際的かつ国際的な研究領域として発展してきた「脱植民地化研究」の過去10年間の動向を総括するもので、参加者同士のネットワーキングを重視しており、申請者にとっても、フランスに加えて、南米・ア

フリカなど多様な地域から集まる異年齢・異分野の研究者との活発な学術交流の機会となった。報告は、英語・フランス語のみならず、先住民族の言語を含めて、基本的に発表者の母語を交えて行われ、フランスからアフリカ諸国への文化財返還問題について、現地のミュージアムの事情を踏まえた現状を報告する発表や、黒人女性の髪をめぐる表象に内在化された差別を鋭く批判する心理学者の報告、被植民者として闘いを身体で表現する芸術パフォーマンスなど、伝統的な学会の型にはまらない、自由で幅広い企画の数々が非常に興味深かった。研究分野として新しい脱植民地研究ならではの、学術的な水準を保ちつつも「継続する植民地主義」やレイシズムに物申そうという明確な姿勢が参加者全体に共有されていたことに感銘を受けた。

申請者は日本、および、東アジアからの唯一の参加者であり、最も若手であったことから、主催者からは、今後、脱植民地研究のネットワークを（東）アジアに拡げてゆく際の要になって欲しい、との言葉をいただき、帰国後も、将来的な研究者誘致・日本での学会開催に向けて、関係者と緊密に連絡を取り合っている。加えて、申請者の研究や歴史実践の現場での経験が評価され、本学会の開催元が発行している学際的なジャーナル『*Revue d'Études Décoloniales*』での特集記事の担当を提案されるなど、本学会への参加は、国際的なキャリア形成の重要な第一歩となった。

(6) 「1961年10月17日」関連の記念行事（コメモラシオン）への参加

申請者は、修士論文において、アルジェリア独立戦争末期のフランス本土において、在仏アルジェリア系女性たちも例外的に参加した、1961年10月の反差別・独立支持デモとその弾圧の分析を行ったが、「1961年10月17日」という日付自体が、現代フランス社会において、独立戦争期の国家・警察暴力の象徴として知られており、毎年10月には様々な記念行事が実施されている。

今回の滞在では、10月17日前後の時期に、パリとその近郊を中心に、形式的な記念行事にとどまらない、より積極的な記憶継承に取り組む自治体や団体によって実施されるコメモラシオンに絞って参加した。16日には、独立戦争時に、パリ郊外の旧アルジェリア系住民集住地域ナンテールで1961年10月デモを経験した男性の証言を聴き、17日には、サン＝ミッシェル広場付近での最大規模の追悼集会に参加し、続く18・19日には、郊外の自治体が住民向けに実施している小規模なコメモラシオンに特別に加わらせてもらった。いずれの場合も、フィールドノートを作成し、現場で関係者とコンタクトを取り、今後の聞き取り調査等への準備を進めることができた。

(7) 西洋史読書会大会 2025 年度大会（11月3日、京都大学開催）において「在仏アルジェリア系女性たちのアルジェリア独立戦争をめぐる経験——1961年10月の抗議行動に注目して——」の題にて報告

帰国後、11月3日に京都大学にて開催された西洋史読書会大会 2025 年度大会にて、在仏アルジェリア系女性たちの独立戦争期の経験について、修士論文の内容を全面的に見直した内容の報告を行った。申請者にとっては、これがいわゆる正式な「学会デビュー」の機会となったが、今回、直前までフランスで一次史料を読み込み、かつ、現地の歴史実践の現場を数多く経験してきたことで、修士論文の段階から更に踏み込んだ分析を行うことができ、研究の成果を自分でも如実に感じられる報告となった。司会を担当していただいた谷口良生先生（フランス史、明治大学）をはじめとする先生方から、研究の独自性や発表自体の水準を高く評価していただいたことも大きな自信に繋がった。

今後の展望 Prospects for the future

申請者は、今年11月の竹沢泰子先生（人種・エスニシティ論、京都大学名誉教授）主催の「批判的人種・エスニシティ研究会」オンライン例会にて、自身の研究の現状に加えて、学術的観点からの渡航報告を行う予定である。これ以降も、同様の機会を活用しつつ、フランス現地での歴史実践への参加経験や学会・歴史

集会・資料調査の経験に基づいた知見を、日本国内の研究者と積極的に共有してゆく。同時に、修士論文と西洋史読書会大会での報告内容を精緻化させ、今回入手した史資料等の分析も組み入れたものを、今年度中に投稿論文としてまとめることを目指している。

申請者は、「在仏アルジェリア系女性たちのアルジェリア独立戦争をめぐる経験とその記憶化」という研究課題で日本学術振興会特別研究員（DC2）として 2026 年度より採用予定であるため、より長期的には、特別研究員採用期間中に、資料調査・聞き取り調査を目的とした博士後期課程 2 年次での中期研究滞在（2026 年、1～3 か月）、および、ナンテール大学や社会科学高等研究院（EHESS）にて専門研究者から研究指導を受け、博士論文執筆に取り組むための長期留学（2027 年）を予定している。